

屋敷囲いとしての石垣を作る文化：喜界島
小野津集落と阿伝集落の屋敷囲いとしての石
垣の比較

URUSHIBARA-YOSHINO, Kazuko / 漆原, 和子

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

151

(終了ページ / End Page)

174

(発行年 / Year)

2005-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022582>

屋敷囲いとしての石垣を作る文化

—喜界島小野津集落と阿伝集落の 屋敷囲いとしての石垣の比較—

漆 原 和 子

1. まえがき

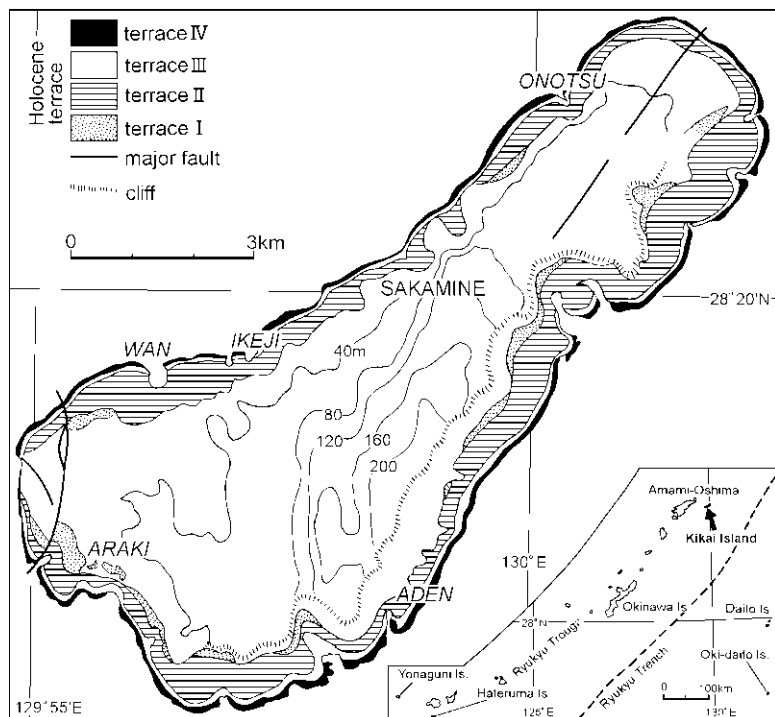
日本における石垣の技法や歴史については、北垣（1998）や田淵（2001）等のすぐれた研究がある。また、琉球の民家の石垣については鶴藤（1995）や、日本民族建設学会（2005）、栄（1979）に紹介がある。本研究では、南西諸島の一例として、よく石垣が残っている喜界島を取り上げた。なお、喜界島は喜界町誌編集委員会（2000）にあるように、1466年から1609年までの143年間にわたって琉球王国の支配下にあったところである。

喜界島の南に位置する阿伝集落における屋敷囲いとしての石垣については、すでに『国際日本学』第1号に詳しく報告をした（漆原・羽田、2003）。日本文化における石垣の景観としての意義や価値と、石垣の文化から考察した喜界島の位置づけについては、漆原（2005）において若干の考察を行った。今回は、喜界島の北の東シナ海側に位置する小野津集落の例を挙げ、島の南の太平洋側に位置する阿伝集落と比較しながら日本における石垣の文化を考察する。

2. 調査地域の概要

2.1 調査地域

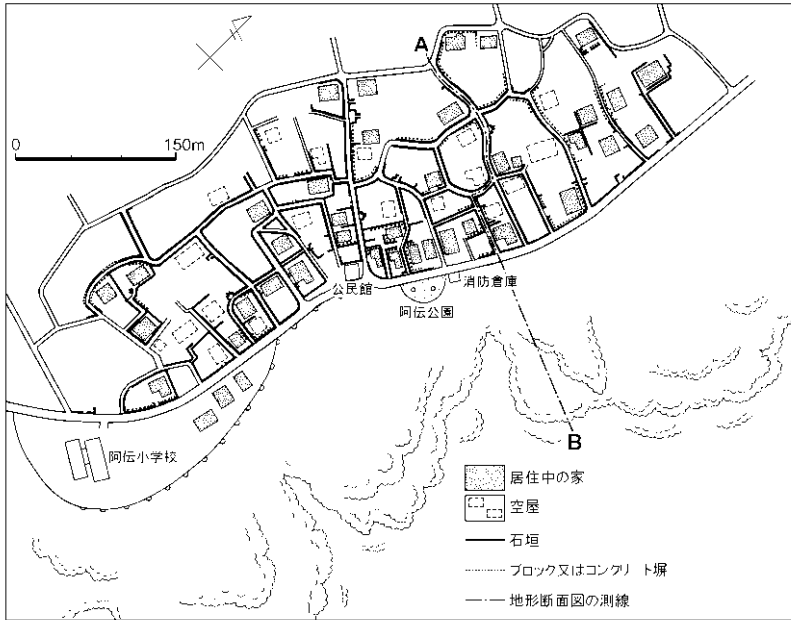
喜界島は、太田他（1978）により、すでに海成段丘区分がされ、サンゴ石灰岩のウラニウムシリーズによる数多くの年代測定も行われた（大村・太田、1992；Ota・Omura、1992；太田他、2000）。その結果にもとづき、完新世段丘の4段の編年も正確に行われている島である。その分布図を第1図に示した。



第1図 喜界島における完新世段丘分布図

太田他（1978）による

更新世段丘については佐々木他（1998）、太田他（2000）、Ota・Omura（2000）により、6段に分けられている。完新世段丘は、この島では多くの集落が立地するところであり、Ⅰ面は標高10～13mで、7,000～6,000年前、Ⅱ面は標高5～7mで、5,000～4,500年前のサンゴ石灰岩からなる段丘である。Ⅲ面は標高2.5～5mで、サンゴの年代測定は3,000～2,500年前を示している。Ⅳ面は標高1.5～2mで、1,500～1,000年前のサンゴ石灰岩の年代測定値が得られている。この島の多くの集落は完新世段丘のⅡ面に位置している。しかし、高度がそれほど高くはなく、かつ、海岸からの距離が近いために、防風と海水飛沫の塩害に対する何らかの工夫をしなければならない位置にある。戦前は藁屋根であったこともあり、どの集落にも屋敷囲いとしてサンゴ石灰岩を積んだ石垣が多数あった。しかし第二次大戦時に火災にあった集落は石灰岩の石垣が生石灰になって

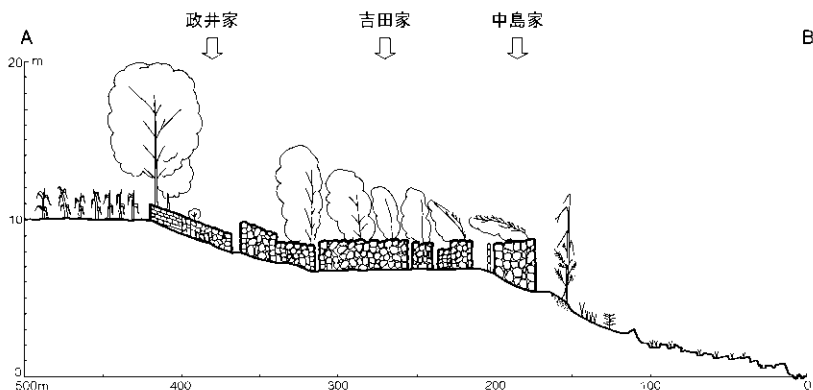


第2図 阿伝集落の石垣分布図（2003年7月調査）

漆原・羽田（2003）による

しまい、戦後新しく石垣を積みなおさねばならなかった。また、空港に近い集落では、爆撃を受けた空港の補修のために、急遽多量の石材を必要としたので、民家の屋敷囲いの石垣をくずして、その石を供出したという。

阿伝の集落には戦前の石垣がそのまま残る地域があり、道幅は狭いが、生け垣と石垣の調和した風景は、住み心地のよさをうかがわせる。2003年度の『国際日本学』第1号で扱った阿伝集落の石垣の分布図は第2図に示した。阿伝は島の南に位置し、集落はTerraceⅡに立地している。海岸にはTerraceⅢとTerraceⅣが分布する。TerraceⅣの面は離水サンゴ石灰岩の上を貧弱な植生が覆うのみで、TerraceⅢは植生が豊かになるが、土壌の発達が悪く、両者とも集落の立地には適していない。TerraceⅡは土壌の発達もよく、防風林ないしは灌木に覆われている。集落の中でも、最も海側にせり出した最前線に相当する位置にある。最も海よりの民家では、防風効果を高めるため、高さが2.4mに達する石垣とその内側にガジュマルの生垣をしつらえてあった。しかし内陸へ



第3図 阿伝集落における地形断面と石垣の高度

漆原・羽田 (2003) による

いくほど石垣の高さは低くなる (第3図)。

阿伝との比較のために取り扱った小野津集落は、集落の規模を戸数のみで比較すると、約5倍大きい。この集落でもTerraceⅣは居住地域にはならないが、TerraceⅢの上端とTerraceⅡは、居住のための主要な地形面として用いられている。阿伝に比較して小野津集落はTerraceⅡ面の発達がよく、幅が広いことが小野津集落の面積を広げ、拡大していくのに好適であったと推定される。

2.2 石垣の時代による変遷

喜界島は周囲に裾礁型のサンゴ礁が分布する。このサンゴ礁では、台風の高波によって破壊されたサンゴ片が波打ち際に打ち寄せられる。こうした天然のサンゴ礫を家屋の周囲に積んで、強風や、海水飛沫の害を防いできた。聞き取りと、役場の広報などの記事から (喜界町役場企画観光課、1991、喜界町誌編集委員会、2000)、昭和30年代前半までは喜界島の多くの集落では、屋敷囲いとしての石垣があったことがわかった。

この島には、島の東側 (太平洋) を通過する台風と西側 (東シナ海) を通過する台風があり、台風による風向は、島のどの方位にあっても強風を受ける島である。2001年の2例の台風については、漆原・羽田 (2003) がすでに報告した。しかし、1) 藁屋根からトタン屋根に変化したこと、2) 集落の中の道路

を消防車が入れるように拡大する必要があったこと、3) 道路の側方に排水路を設ける必要があったこと、などから、昭和30年代後半には、多くの集落の石垣を積み直し、道路の拡幅工事が行われた。この際、既存の石垣を利用し、石を積み直した家と、ブロック塀にかえた家が生じた。阿伝では多くの家屋が石を積み直した。また、戦前からの石積みがそのまま残された区画もある。阿伝に比較すると小野津の集落では、このような時代の流れに対し、昭和30年代に道路の拡幅に伴ってブロック塀や樵石の石垣にかえた家が多い。昭和30年代から40年代には野石積の石垣の間をセメントでうめて補強する方法もとられた。しかし、風が通らず、住み心地がよくないという理由から、昭和50年代以降、この方法はとられなくなった（守内悦造氏談）。

小野津集落は、阿伝とは違う2つの特色がある。第一に小野津集落内に今も高倉が7基残ること

である。高倉は4本のイジュの大木を必要とするが、喜界島ではこの木材が入手できない。サワラの1本釣りで現金を得た際、大島から1本ずつ購入し、4本になると高倉を建てたという。本来藁屋根であったが、火災に対処するため、昭和30年代から高倉の屋根をトタンにかえていった。かつては、食糧保存用の倉として用いられたが、今はほとんどの家で、



写真1 小野津集落高倉

用具の保管場所として利用している（写真1）。

第二に石敢當が多数見受けられることである。中国由来であるが、琉球では魔よけの意味を込めて、集落のT字型の道路の石垣の中に、「石敢當」の文字を刻んだ石を埋め込んである。阿伝の集落には、石敢當は存在しなかったが、小野津集落には複数の存在を確かめることができた。小野津は東シナ海側に面して立地する集落として、「湾」について良湾としての条件を備えた深い入江がある。背後の更新世段丘面からの湧水が豊富に得られることから、集落立地に適しており、サワラの1本釣りの漁湾として栄えた港町である。東シナ海側の海岸に立地する集落の中で、最も屋敷囲いとしての石垣がよく残っている集落である。集落の位置から阿伝と小津野では防がねばならない風の方向が違うであろうと考え、本報告では小野津で、そのこともあわせ、考察した。

2.3 喜界島における風

南西諸島の気候特性については、漆原（1980、1986、1990）がまとめたように、年による乾湿の変動の激しいところである。一方、本州よりはるかに強い台風の影響を受けるところでもある。

屋敷囲いとしての石垣を設置するのは、防風が主要な目的と考え、喜界島の風を、年間の風速と風向を考慮し、風配図（2004年）を作成した。島の観測記録は池治の（28° 19.2' N、129° 55.7' E）の値を用いた。第4図には年間の風向頻度と風速5 m/s以上の風向頻度を示した。5 m/s以上の風はN、NNW、NWが極めて多く、この3方向のみで33%に達する。これを季節別にみると、2月に風速5 m/s以上の風はN～NWの風向で卓越する。8月から9月は、SE～ESEの5 m/s以上の風の比率が増す。2月と8月から9月のこの傾向は、冬と夏のこの島の季節風としての特色を示している。しかし、屋敷囲いをしなければならぬほどの強風は、季節風以外に台風が考えられる。従って、2004年の喜界島に影響を及ぼした台風をすべて点検した。その結果、全台風29個のうち12個が喜界島に強風をもたらした。そのうち、台風の中心が島の東側を通った台風は5個で、西側を通った台風は7個である。東側を通った1例として、中心気圧が低く、風速が強い台風16号を取り上げ、8月28日17時より8月30日5時までの風向と風速を、第5図（a）、（b）に示した。台風の中心が喜界島に接

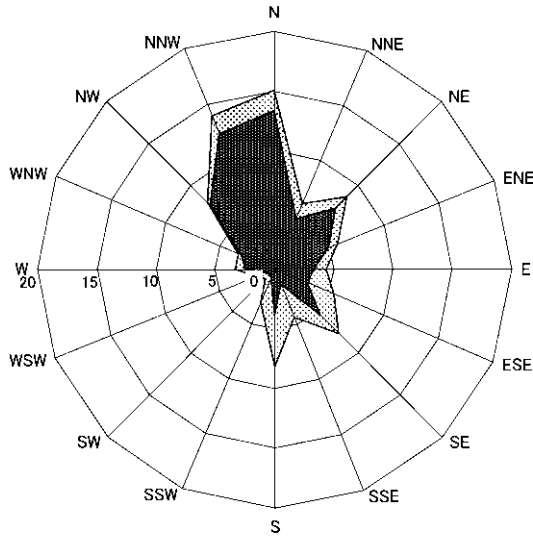
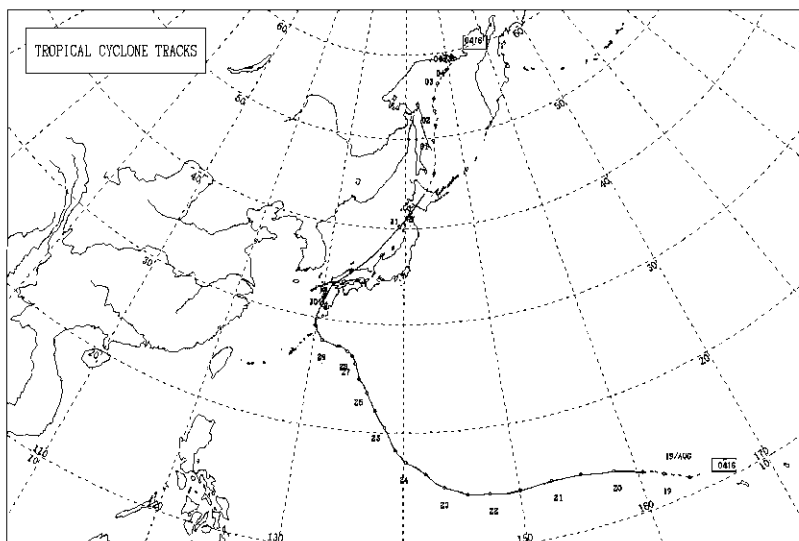


図1年間の風向頻度(%) ■ 風速5m/s以上の風向頻度

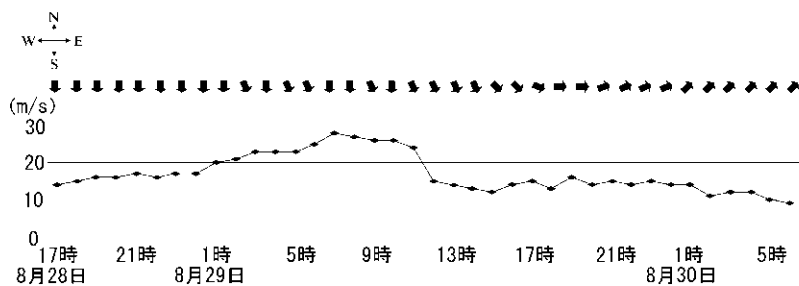
第4図 喜界島における風向頻度図

近し始め、風速が10m/sを越え始めると、N方向の風が吹き、最大風速28m/sを示した。台風が中心が北に向かうにつれて、風向は北西から西へ、そして南西へと変化した。この台風の場合は、小野津の集落は、風と海水飛沫が直撃する位置にある。この他にも島の東側を通過する台風6号においては、北～北西～西の最大19m/sに達する強風がみられた。

島の西を台風が中心が通過した場合の例として、第6図(a)、(b)に台風18号の場合を示した。中心の最低気圧は925hPaで、最大風速は18m/sに達した。第5図(b)の10m/s以上の風が吹いたときの風向は、9月4日20時より北東から東にかわり、17時ごろから南東にかわり、9月6日16時には南にかわった。この方向の台風の風の場合は、小野津の集落の位置は更新世段丘の風下になり、少なくとも海水飛沫の影響は少ない。2004年の台風の通過経路から考察すると、小野津の集落を直撃するNからWよりの風の吹く台風は、島の東側の太平洋側を通る台風である。



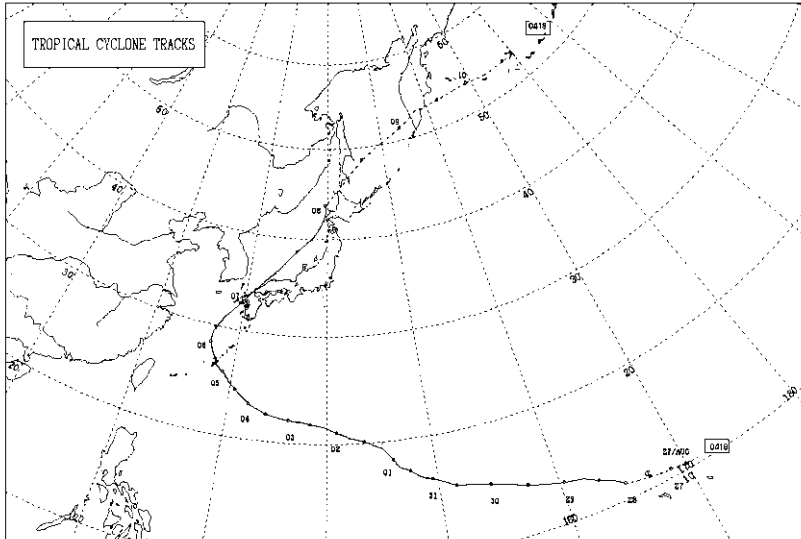
(a) 2004年台風16号の経路図



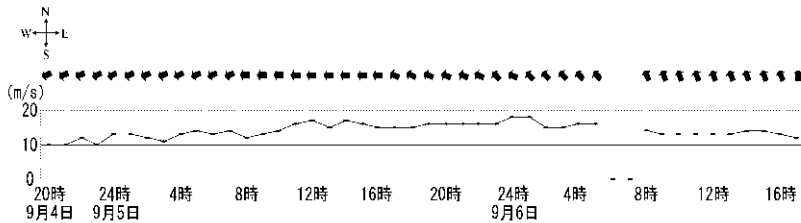
(b) 池治における風速、風向の変化

第5図 2004年台風16号の経路図 (a) および池治における風速、風向の変化 (b)

台風時の強風が吹く際は、台風が接近する前から高波がたち、そのため海水飛沫の影響が集落に及ぶ。しかし、その観測記録はなく、聞き取りや、台風通過直後、植生が塩害を受け、葉が茶褐色になって落葉し、2～3年回復できないことから、海水飛沫の影響を知ることができる。



(a) 2004年台風18号の経路図



(b) 池治における風速、風向の変化

第6図 2004年台風18号の経路図 (a) および池治における風速、風向の変化 (b)

3. 調査結果

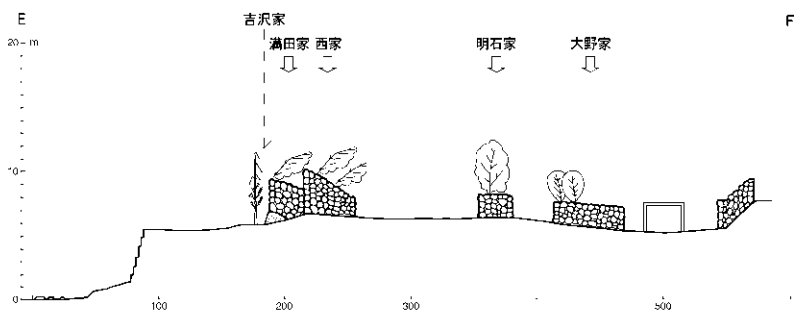
小野津は漁港であり、地区の中心に小学校がある。これを中心に西側を前金久地区、東側を神宮地区と呼ぶ。それぞれの地区ごとに調査結果を述べる。

3.1 前金久地区

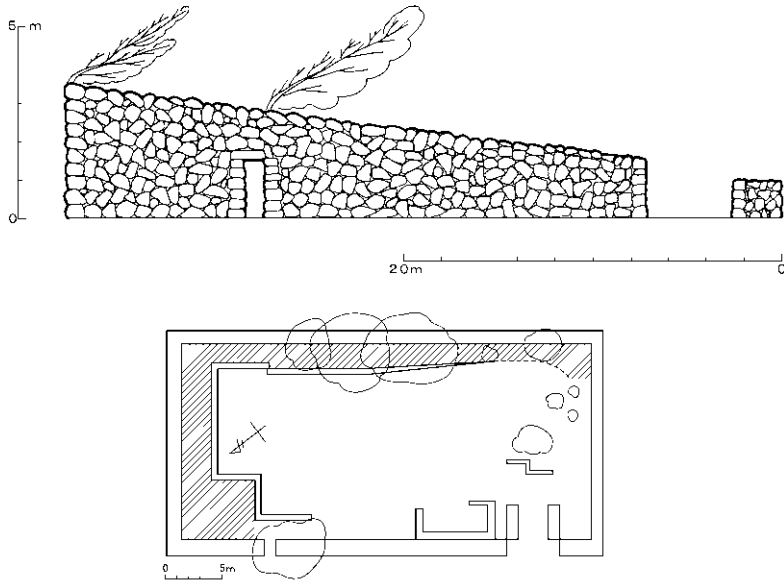
調査は2003年と2004年に行ったので、第7図に示す石垣とブロック塀の分布



第7図 小野津集落、前金久地区と、神宮地区における石垣の分布図
(2003年7、8月、2004年9月調査)



第8図 小野津集落E-F断面に沿う石垣の高度分布

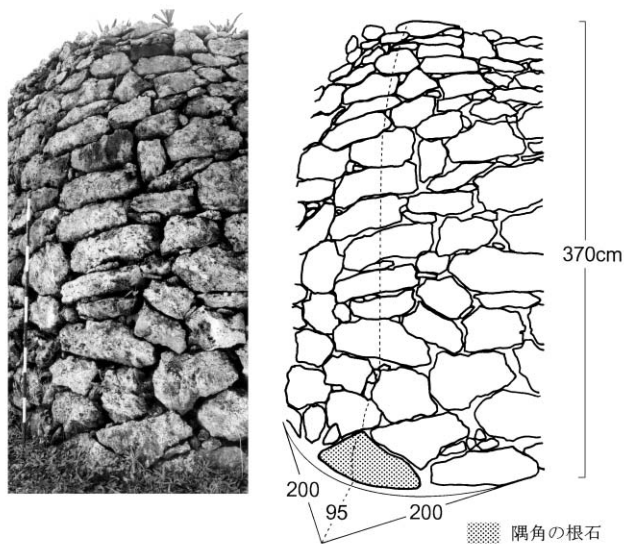


第9図 西家の平面図と石垣断面図

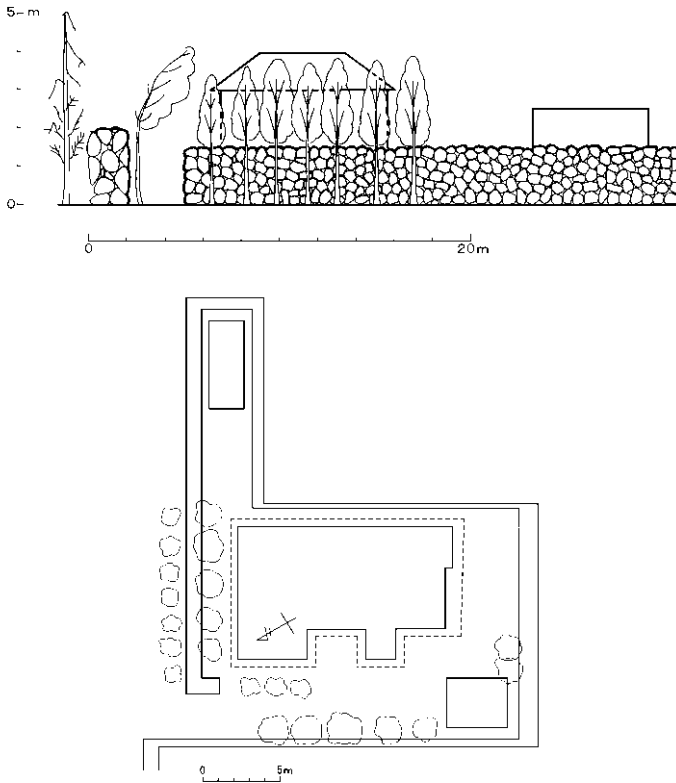
は当時のものである。小野津は『国際日本学』第1号（漆原・羽田、2003）に示した阿伝よりも、コンクリートとブロック塀がより多くなる。平面図の他に、基線に沿って海岸から山の手側に断面図（E-F）を作成し、第8図に示した。この地区の集落は、ほとんどが標高約6mに立地している。完新世のⅡ面相当の地形面上にある、この地区の特色は、海岸部の最前線には高さが極めて高い石垣を積んだ家屋が目立つことと、その多くが石垣を残して空き地になっていることである。また海岸部は、石垣の内側をガジュマルやアカテツの生垣で覆っていることである。これらの生垣は、石垣の高さより高い部分は、強い塩風により、偏形している。この集落で最も高い石垣は西家のものであるが、住宅の部分はなく、現在は空地となっている。第9図にその平面図と断面図を示し、石垣を写真2に示した。写真2は海側の隅角に相当し、野石を曲線上に積んでいる。第10図には隅角の写真（左）と、図面（右）を示した。隅角には、大きなサンゴ石灰岩の根石が入っている。また隅角は曲面でとっているのが特徴で



写真2 小野津集落前金久地区の西家の石垣 高さ3.7m



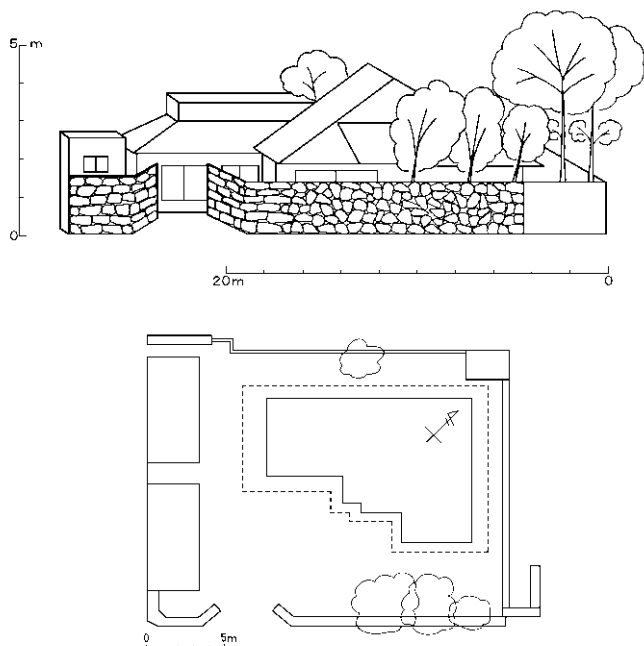
第10図 西家の石垣の隅角の見取り図
左側 隅角の写真、右側 隅角の図面



第11図 吉沢家の平面図と石垣断面図

ある。この石垣は、家屋側は2段の構成になっている。即ち、外側は3.7mであるが、内壁側は1.5m下に一段平坦面を取り、ここは畑にしていた。それから、もう1段の石垣（2.1m）で屋敷の地面に下りる構成になっている。母屋への門は、海岸と直角な位置に相当する西側についていて、ヒンプンの形式を整えている。石垣の隅角は直角ではなく、曲線であってあることも特色である（写真2）。

海岸の最も近接した位置にある吉沢家（第11図）（海岸から直線距離で約200m）では、石垣の高さは2mであるが、石垣の海側にモクマオウの生垣があり、石垣の内側にはアカテツとガジュマルの生垣がさらにあり、防風と海水飛沫を避ける工夫がされている。玄関は門に対して直角方向にとってあり、門



第12図 大野家の平面図と石垣見取り図

から玄関に至るまで、さらに生垣がある。このように十分に強風に対する防風対策がされている。吉沢家はかつて、石積みの職人であったこともあり、『国際日本学』第1号に述べたように、各種の石工のための道具を有している（拝見させていただいた吉沢氏に深謝する）。また、経験にもとづくと、ハンマーの柄にはグミの木がしなるのでよいという。

E - F断面の中間に位置する大野家の平面図と、斜め図は第12図に示した。吉沢家よりも内陸側に直線距離で約150m入り込んでおり（海岸から420mの距離）、大野家の方がはるかに弱風域にあると思われる。石垣の内側にのみ生垣があるが、この樹木は風で偏形をしていない。正面の門に面した側のみ生垣であり、側面はコンクリート塀である。その高さは最も高いところで1.8mである。このことから、この位置では、風はかなり弱められていると考えられる。先代と現在の御当主の2人で積んだ石垣であるとのことであった。

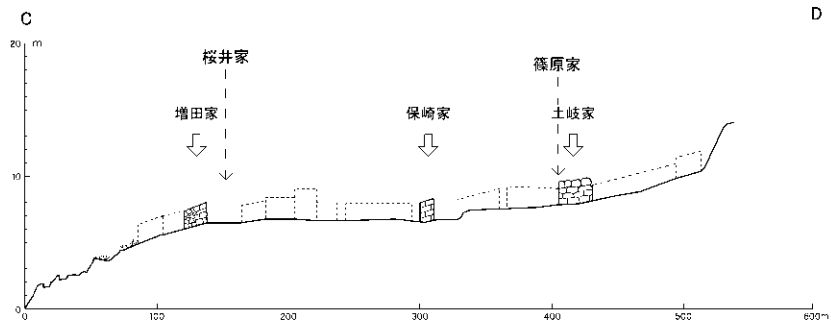
E・F断面の最も内陸側の民家では、標高が高くなる。しかし、Terrace I 面に対比できるかどうかは不明である。海岸からの距離は、基線に沿って約550m内陸へ入っていて、石垣は1.8m以下である。生垣は全くない。風の強度から考えると、この位置での石垣は、これほどの高さを必要としないと思われる。しかし、高さを十分にとった石垣が施されているのは、経済的に高い石垣を築くゆとりがある集落であることが推定できる。

3.2 神宮地区

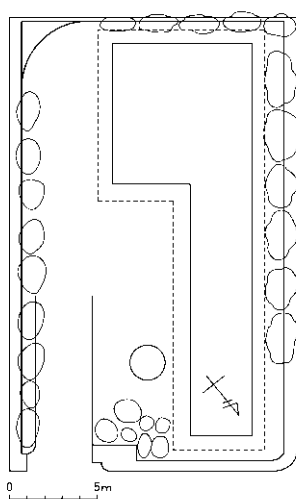
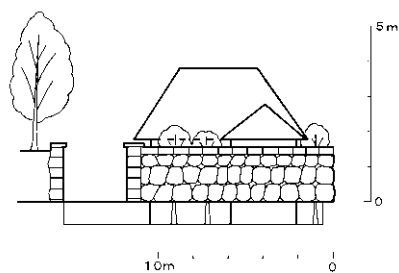
神宮地区は漁港を中心とし、小学校、郵便局もあり、小野津の中心地区を含んでいる。しかし、道路に沿った全塀の長さから、石垣として残されている長さを測ると、コンクリート塀の比率が前金地区よりも高くなっている。ここでも、最も典型的と思われる位置に基線C・Dを設けた。C・Dの位置は第7図に示した。C・Dの横断面は、第13図に示した。この地区は完新世段丘面Terrace II面に相当する標高約6～7m面に、ほとんどの住居は集中している。海岸か



写真3 小野津集落、宮前地区の桜井家の門と80cm下がった母屋

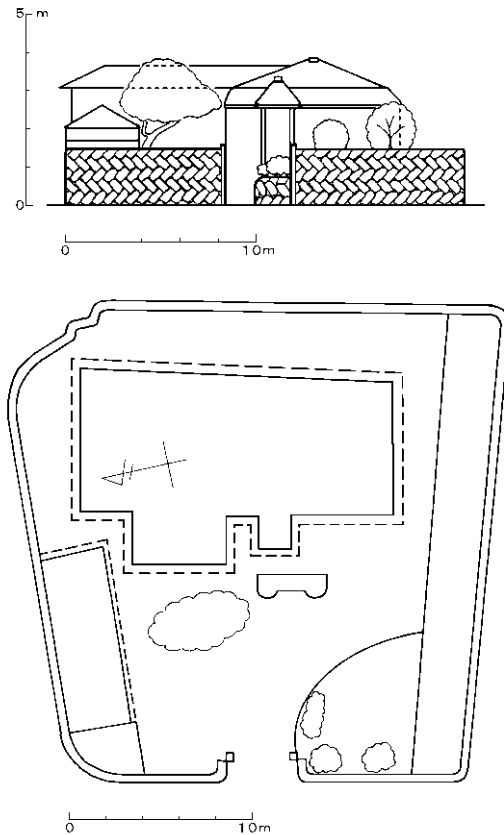


第13図 小野津集落のC-D断面に沿う石垣の高度分布



第14図 桜井家の平面図と石垣見取り図

らの位置から考察すると、C - D断面の増田家に相当する位置にある、桜井家の断面図と平面図を第14図に示した。門の側から母屋が下がっている様子を写真3に示した。桜井家は野石そのものではなく、サンゴ石灰岩の樵石を用いた石垣である。海岸に近く、強風を避けるために、1) 石垣を高く積むことの他に、この島でとられている方法は、2) 屋敷の敷地を約70~80cm掘り下げて、家屋の位置をできるだけ地面より低い位置にし、かつ掘り下げなかった原面に石垣を積むという方法である。桜井家はこの第2の方法を取り入れた例であり、成形した樵石を用いて、1986年に積んだ石垣である。約70~80cm掘り下げた



第15図 篠原家の平面図と石垣見取り図



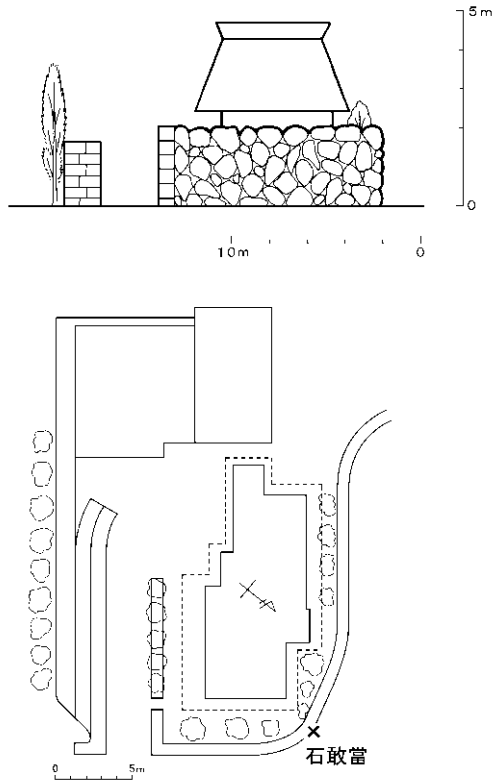
写真4 小野津集落、宮前地区の篠原家のヒンブン

ことにより、台風の雨や、海水飛沫の排水が危惧されるが、敷地はサンゴ石灰岩の上を砂丘砂で覆っている地形であるために、大雨であっても降水や海水は十分に浸透する。このため排水の心配はない。

第15図には篠原家の平面図と石垣の断面図を示した。この位置は、海岸から約420mに位置し、阿伝集落の例ではすでに風が弱まり石垣は低くても十分に防風、防水効果がある位置である。篠原家のある位置の平均的家屋は、1.5m（断面図では破線で示した）であるのに、篠原家は1）1.8mと高く、かつ2）サンゴ石灰岩の樵石が積まれている。3）門を入るとヒンブンの型をした石垣があり、その石垣の中は灌木の生け込みができるようになっている。このように、1）～3）の特色を持つ。門からみたヒンブンを写真4に示した。ここにも琉球の形式の影響をみることができる。また、ヒンブンの石垣の中に灌木を生け込む例は、鹿児島県の知覧の武家屋敷群（漆原、2005）の中にも、その例をみることができる。これは石垣のヒンブンをアレンジした琉球様式の一種の亜型とみなすことができるであろう。ヒンブン型の門を入った目隠しに相当す

る位置に生け垣を生け込む例は、阿伝集落に1例あった。この生垣型のヒンプンは、鹿児島県の出水（漆原、2005）でもその例をみることができた。これも、琉球様式のヒンプンの亜型の一つとみなすことができるであろう。篠原家も、次に示す土岐家の場合も、風の強さ、海水飛沫などの自然条件のみを考慮して石垣を作っているのではないことがわかる。即ち、必要以上に高さのある立派な石垣で屋敷を囲っている点に注目したい。

第16図には土岐家の例を示した。土岐家も石垣の高さはほとんど篠原家と同じく約1.8mである、門とその周りのみ樵石で整層積みである。その他は野石積みで西の隅角は面取りをしてあり、曲線を描いて曲がる。かつ、角にあたる曲



第16図 土岐家の平面図と石垣の断面図



写真5 小野津集落、宮前地区の土岐家の石敢當

線の位置には、石敢當（写真5）がはめてある。この集落には他にも複数石敢當がはめてあるT字路があった。琉球由来の石敢當の風習を色濃く残していることがわかる。この他にも、今は家主は県外や海外にいて、住んではいないが、その空き家を管理する人がいて、かつ立派な石垣を再建築しなおしている家などがある。小野津集落では、石垣のもう一つの役割は、家の外観を整えるものである。自然条件が必要とする以上に立派に高く築くのは、ステイタスシンボルとしての役割を持っていると考えた。断面図C-DとE-Fにも示したように、この集落の場合は、石垣の高さは阿伝でみられたように自然条件のみで決まっているのではなくて、各戸の経済状況や美意識、住み心地などの要素にも影響されていて、単純ではないことを示している。

4. 日本文化としての石垣に関する調査結果の若干の考察

屋敷囲いとしての石垣を積む文化を、喜界島の小野津集落と阿伝集落を例にとって調査した結果を踏まえ、日本文化論とのかかわりから考察しておきたい。

日本文化における石垣の景観としての意義や価値についてすでに考察を行った（漆原、2005）が、それを基礎にして、さらに今回の現地調査の結果を加え、再考する。

“風土は人間存在の契機である”（和辻、1936）とする定義は、小さい島の海岸にある小さい集落の分布という小スケールについても成りたつことがわかる。特に、屋敷囲いとしての石垣はそのよい指標で、石垣の高さ・厚さ・積み方・材料・方向・残存率・生垣との併用状況などは、石垣が表現している風土の指標であることが指摘される。これらは大スケール（マクロスケール）の考察では取り上げることが不可能であり、小スケールの場合にのみ可能である。別の言い方をすれば小スケールにおける風土のよい指標の例である。

屋敷囲いとしての石垣をリージョナルスケール（地域スケール、またはメソスケール、中スケール）からみると、日本文化における沖縄文化（琉球文化）の影響範囲を示している。九州または本州文化圏と琉球文化圏が接する地域におけるよい指標である。特に、石垣の積みかた、隅角の曲線、石積職人の出身地などはそのよい指標要素である。

一方、「風土とは心の受け入れ体勢である」（吉野・福岡、2003）という感覚的、心理的または人間社会学的な定義がある。これは、小さい島の中で、海岸からの距離があり、防風機能のみから考えれば不要な地域でも、小野津集落の例にみられるように、立派な石垣を造成している。これは、その家の所有者の経済力・格式のひとつの表現と考えられる。住家の大きさ・建材などばかりではなく住家（屋敷）を建築物の総合体として把握する場合、石垣の必要性を認識している結果であろう。

5. 結論

喜界島の屋敷囲いとしての石垣がよく残る阿伝と小野津集落において、比較しつつ、石垣の特色を調べた。その結果、以下のことがわかった。

- 1) 阿伝、小野津集落ともに、石垣のほとんどが戦後積みなおされた。
- 2) 阿伝集落の方が、空家、空地率は多いが、石垣の比率が高く、ブロック塀の比率が低い。小野津集落は石垣の残存率は低く、ブロック塀の比率

は高い。

- 3) 小野津集落の石垣の高さは、海岸沿いでは特別に高く最高3.7mで、厚い石垣が築かれていた。生垣を併用しているが、アカテツとガジュマルの組み合わせである。
- 4) 阿伝集落は、最も海岸寄りで2.4mの石垣があり、生垣はガジュマルとの組み合わせである。
- 5) 阿伝では障子垣の形式が多くみられたが、小野津には障子垣はほとんどない。ヒンプンの亜型は小野津、阿伝ともにみられた。小野津は石垣で作り、生け込みがしてある。阿伝は生垣で作ったヒンプンである。
- 6) 阿伝は野石積みが多数であり、門の位置のみ樵石を用いる家が多い。小野津は、樵石積みで間地積みや、樵石の乱層積みがみられ、石工専門職に依頼した石積みが多くみられた。
- 7) 海岸からの距離と石垣の関係は、阿伝では極めてはっきりしており、海岸から内陸へ石垣が低くなっている。しかし、小野津では内陸であっても石垣が高く、樵石を用いた例があり、石垣を築くための各戸の経済力の違いや美意識の差が石垣にあらわれていて、小野津では、自然条件のみで石垣の高さが決定しているのではないことがわかった。
- 8) 小野津には高倉が多く残り、阿伝に比較して経済力にゆとりがあったことがうかがわれる。
- 9) 石敢當の個数も小野津に多く残るが、T字型の魔よけの意味を込めていることは琉球と同じである。また、石垣の隅角は曲線を描くのは阿伝と小野津集落ともに同じである。
- 10) 喜界島では、以上の5)と9)は琉球の文化を継承するものと考えられる。しかしすでにヒンプンには改変が加わり、琉球の型そのもののコピーではない。かつ、改変の方法は、九州のかつての薩摩藩の外城であった出水、知覧の屋敷群にもみられるものである。
- 11) 1)から10)までのことがらを総合し、屋敷囲いとしての石垣を通して喜界島の位置を文化的に把握すると、琉球と本州の両文化の影響がみられ、かつ、門の形式が一部変質していることを考えあわせると、両文化が融合した地域であると捉えることができる。

謝 辞

喜界島の石垣の調査にあたって、喜界町観光課課長嶺田一成氏には便宜をはかっていただき、深く感謝します。小野津の宮前地区の班長には、集落での各戸の調査のために、便宜をはかっていただき感謝いたします。また、小津野の石積みの歴史や技術的なことに関して、守内悦造氏には何度もの質問に丁寧に答えていただき、現地の案内をしていただいた。この原稿を執筆中に訃報に接し、御教示いただいたことを感謝申し上げるとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

現地調査は、平成14年度現地研究に参加した学生諸君や、現地調査に協力してもらった学生、院生の補助無しには、なし得なかった。現地での聞き取り調査や、石垣の分布図作成のため協力してくれた多くの地理学科学学生諸君に感謝する。

参考文献

- 喜界町役場企画観光課 (1991)：『広報喜界縮刷版第1巻鹿児島県喜界町』。鹿児島県大島郡喜界町，641p.
- 喜界町誌編纂委員会 (2000)：『喜界町誌』。喜界町，1010p.
- 北垣聰一郎 (1998)：『ものと人間の文化史 58・石垣普請』。法政大学出版会，415p.
- 日本民俗建築学会 (2005)：『写真でみる民家大事典』。柏書房，470p.
- 大村明雄・太田陽子 (1992)：サンゴ礁段丘の地形層序と構成層の230Th/234U年代測定からみた過去30万年間の古海面変化。第四紀研究，31，313-350.
- 太田陽子・町田 洋・堀 信行・小西健二・大村明雄 (1978)：琉球列島喜界島の完新世海成段丘－完新世海面変化へのアプローチ。地理学評論，51，109-130.
- Ota, Y. and Omura, A. (1992)：Contrasting styles and rates of tectonic uplift of coral reef terraces in the Ryukyu and Daito islands, southwestern Japan. Quaternary International, 15/16, 17-29.
- Ota, Y. and Omura, A. (2000)：Review of coral reef terrace studies at Kikai Island, Ryukyu Islands, southwestern Japan. The Quaternary Research, 39 (1), 45-53.
- 太田陽子・佐々木圭一・大村明雄・野沢香代 (2000)：喜界島東岸，志戸桶付近の完新世サンゴ礁段丘の形成と離水過程－ボーリング資料に基づく再検討。第四紀研究，39 (1)，81-95.
- 榮喜久元 (1979)：『奄美風土記』。大和学芸図書，271p.
- 佐々木圭一・大村明雄・太田陽子・村瀬 隆・吾妻 崇・小林真弓・伊倉久美子 (1998)：南西諸島喜界島の志戸桶北海岸における完新世海退サンゴ礁段丘の形成過程。第四紀研究，37 (5)，349-360.
- 田淵実夫 (2001)：『ものと人間の文化史 15・石垣』。法政大学出版会，214p.
- 鶴藤鹿忠 (1995)：『琉球地方の民家』。明玄書房，389p.
- 漆原和子 (1980)：気候からみた南西諸島とその周辺地域の気候特性について。東北地理，32 (3)，110-119.

- 漆原和子（1986）：南西諸島の気候変化．『気候変動の周期性と地域性』．河村武編，古今書院，194-207.
- 漆原和子（1990）：石垣島のサトウキビ収穫と気象の関係—時代による変化—．駒沢地理，（26），1-12.
- 漆原和子（2005）：風土が作る文化—文化景観としての石垣—．国際日本学第2号，127-149.
- 漆原和子・羽田麻美（2003）：屋敷囲いとしての石垣を作る文化—喜界島，阿伝集落の例—．国際日本学第1号，130-168.
- 和辻哲郎（1936）：『風土』．岩波書店，407 p．
- 吉野正敏・福岡義隆（2003）：『環境気候学』東京大学出版会，392 p．

Japanese culture as represented by stone walls used as wind breaks surrounding houses: A comparison of Aden and Onozu villages, Kikaijima

URUSHIBARA-YOSHINO Kazuko

In earlier studies, the author has compared stone walls surrounding houses in terms of their forms, uses, and materials, in the area embracing southwest Japan and Kyūshū, concentrating on the southwest islands. This paper deals with the village of Onozu, situated on the northern coast of Kikaijima, one of the Amami Islands, which has a harbor open to the sea to the northwest. Comparison has also been made with the village of Aden, situated on the south coast of the same island and with a harbor open to the Pacific Ocean, about which the author published a report in the first issue of this journal. Both villages share the use of stone walls made of coral limestone, built up in the Nozumi style. However, there are important differences between them in terms of the heights of the stone walls, the way they are used, and the inhabitants' attitudes towards them.

Aden village has suffered severe depopulation, and the number of households has decreased to one-third of 1960 levels. The height of stone walls in this village shows a clear pattern: the further away a house is from the sea, the lower its surrounding walls are. Ono village, in contrast, has suffered less from depopulation, with a lower decrease in the number of households. Here, when a house becomes vacant, someone in the village takes over the responsibility of ensuring that the house and its surrounding walls are maintained. The general tendency is for houses closer to the sea to have higher surrounding walls, but there are also many cases where high walls are constructed as wind breaks in elevated areas and areas further inland. In other words, neither topography nor distance from the sea functions as the major factor in deciding the height of the stone walls. Inhabitants of Ono village view the

stone walls as a type of status symbol, and feel pride in maintaining them in good condition. It is clear that, while environmental factors play a role in determining the necessity for the construction of the stone walls, other factors are involved. Regional differences in the forms of these stone walls result from various cultural factors, such as individual wealth, emotional attachment to the structure, the weight of tradition, and an aesthetic appreciation of the beauty of their form and the visual unity that they bring to wider areas within the village.